

CURES Salon

『組織の管理会計』における一つの論点

吉 村 文 雄

組織成員の個別的意思決定を組織の共通目標を志向して統合する機能は、調整機能と呼ばれているが、企業組織において、これは企業予算を用いることによって遂行される。このような企業予算の機能側面を予算管理と呼称すれば、予算管理は、結局は企業予算の基軸をなす企業会計によって規定される、とみるのが拙著『組織の管理会計』（1992年9月、高文堂出版社）における論点の一つである。この点を最近のマネジメント・コントロール論の展開に即して、とりわけアメリカのマネジメント・コントロール論に対して批判的な諸理論の吟味をとおして解明する。今日の管理論には、外的環境からの刺激に対する企業組織側の反応性にとりわけ注目するものが多く、そのために外的環境に対応する内発的必然性をとらえがたくしている面がある。このことは、外的な上位構造から企業組織総体に接近し、かつ、その内部において躍動する活動性を認めながらも、その内部にまで踏み込む分析を廃棄し、組織の管理を総体性と契機との脈動性においてとらえることをしていないことによる。その結果は、戦略→経営統制→業務統制という図式をなす階層的に一方向的な統制論となってあらわれ、組織成員の能動的な関与をむしろ形式化する方向に導く統制過程が潜在化することになる。この理論は、一般に組織の公式管理機構を前提するものであり、そのかぎりにおいて妥当性をもつといえるが、実は、ここに一つの大きな問題がある。つまり、現実の組織には、公式管理機構とは異なる構造が存在するとみなければならないからである。この後者

の構造の特徴は、一般に、資金、技術、調整のいずれかとかかわってあらわれるが、今日では情報・知識とのかかわりが重視される。この構造と企業会計の対立と合一は、前述の論点の内容をなしている。この場合、企業会計の機能は、測定・伝達の過程と教育・浸透の過程との2行程の相互作用からなる、とみるのが筆者固有の見解である。本書では、とりわけ後者の過程を重視する立場から論じている。これは、従来の会計理論において軽視されてきた側面であり、その意味では会計の歴史的分析に対しても新しい視角を提供しようと考えている。ところで、会計は、一般に、実態の写像としてとらえられるが、実際には、経済過程の写像という実態システムに内在する媒介手段をとおして現象するとみなければならない。この2つの写像過程のうち、企業にとって社会的に有意義な過程は、後者に関するものであり（異論もあるが）、近代の会計、理論もそこに焦点をおいて議論している。このように、組織においては、伝達と教育・浸透の側面が重視され、成員は、このような対話プロセスによって組織にとって有意義な知識を獲得する。株主層あるいはマクロ層において形成される理念が、組織内において変容を被る過程の展開には、上述に示すような側面が存在している。それはまた、企業の実質的構造に対応する調整機能の典型的な形態の存在を示すものであり、ここに、組織の計数管理における特殊性の側面とともに、技術的特徴の発現態様を見出すことができるのである。

（金沢大学経済学部教授）